

【決意声明】

私たちは決してあきらめない

さまざまな思い出が詰まった国立競技場を壊し、美しい神宮外苑の空と緑を奪い、地元住民の暮らしを脅かす、この巨大な建造物を建てさせるわけにはいかない。将来世代に多大な負荷をかける新国立競技場計画は絶対に阻止しなければならない——この強い思いに突き動かされ、あくまでも市民の立場で問題点を追究し、発言しよう、私たち共同代表11名は、昨年10月、「神宮外苑と国立競技場を未来へ手わたす会」を結成しました。

そして約1年、勉強会やシンポジウム、署名活動、各関係機関への要望書提出、IOCとの面会、地元住民との連携など、さまざまな活動を展開してきました。

こうした活動を通して多くの方々から学び、共に考え、問題点を明らかにしていくことで、私たちは、この新国立競技場問題が、単に神宮外苑にとどまらない、日本社会が本質的に抱える重大な問題を浮き彫りにするものであることにも気づきました。

本日シンポジウムにご登壇くださった皆様による発言は、この運動の過程であり、成果であり、そして、これからさらに挑戦していかなければならない問題の提起でした。

なぜ曖昧な議論のままデザインコンペの審査結果が通り、問題点を指摘する専門家、そして市民の声が反映されずに、「既に決まったこと」として計画が粛々と進んでいくのか。この新国立競技場計画には、欧米諸国では当然のことである市民参加が組み入れられていない、日本の政策決定プロセスの根源的欠陥がもろに露呈しているとしかいいようがありません。

私たち市民は、ザハ・ハディド案が目の前に突きつけられて初めて、事の重大さを知ることになりました。それで初めて気づく市民の方が悪い、いまさら遅い、という声も多々聞かれます。しかし、アリバイのように国民に知らせたという形だけを整えても、意見が反映されるシステムは実質的にはない。あったとしても、それを市民が活用するには、多大な時間とエネルギーを使わなくてはならないのです。

昨年、この運動を始めた頃から比べれば、賛同者も35000人を超え、確かに私たちの運動のうねりは大きくなりましたが、残念ながら現時点では計画が撤回される兆しはありません。しかし、私たちは、神宮外苑の歴史と景観を守り、将来の世代に大きな負担を残さない、真に国民の財産となりうるスタジアムの実現を追究し続けていくことをあきらめません。

今からでも遅くないと信じて、コスト、環境への影響、スポーツ施設としての欠陥などについてさらに学び、この閉じられた政策決定のプロセスに風穴を開けていくことに、力を注いでまいります。

私たち「神宮外苑と国立競技場を未来へ手わたす会」は、知ろうとしない、伝えようとしない、行動しようとしないことは未来の世代への「罪」だと認識し、これからも人々の前に問題を明らかにし続けていく覚悟です。

私たちの決意に多くの方が賛同し、ともに活動していただきますよう今後ともよろしくお願いいたします。

2014年9月26日

神宮外苑と国立競技場を未来へ手わたす会 共同代表

大橋智子(大橋智子建築事務所)

上村千寿子(景観と住環境を考える全国ネットワーク)

酒井美和子(デザイナー・まちまち net)

清水伸子(一般社団法人グローバルコーディネーター)

多田君枝(『コンフォルト』編集長)

多見貞子(たてももの応援団)

日置圭子(地域文化企画コーディネーター・粋まち代表)

森桜(アートコーディネーター・森オフィス代表)

森まゆみ(作家・谷根千工房)

山本玲子(全国町並み保存連盟)

吉見千晶(住宅遺産トラスト)

メール info@2020-tokyo.sakura.ne.jp

ホームページ <http://2020-tokyo.sakura.ne.jp>